
The hoped one

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The hoped one

【ZPDF】

N1219C

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

「好き」この一言を言つことだが、彼らにとつてはどうしても難しい事だった 明日、結婚を控えている女王は彼と併に明日を望むことにした。

■ 桜の咲く（漫畫化）

まず、亞アコフアン・ナイトメア・プロジェクトの方々へ。
真に勝手ながら、一部キャラクターを結構ついております。
大変に申し訳ござりません。

内容に関しては、全く違つものと致しますので、あえてファンファ
クションには致しませんが、これ、ひとつとして…と思われる部分
を含む可能性がございます。

あらかじめご了承の上、本編をお楽しみ頂けたら幸いです。

雨の日

…今日もまだ、雨が降り続いている…

私は城の中にある大きな窓から外の様子を見ていた。
緑に彩られたきれいな国。

私はその国の城で働いている。

「はあ…」

不意にすぐ近くからため息が聞こえた。
そちらの方を向いて私は驚いた。

「…陛下?なぜここに…?」

そこにいたのはこの国を治めている女王だった。

女王と言つても、まだ10代の半ばの少女なのだが…
少しウーハーのかかる金の髪に蒼い目をした彼女は私のすぐ隣で
同じように外を眺めていた。

「…ねえ、ビル。今日もこのまま晴れないのかしら?」

彼女は私の質問を軽く無視しながら逆に質問をしてきた。

「ええ…この様子だと、そうですね」

「やつ…」

雨の音が絶え間なく聞こえる…

「一生、この雨が止まなければいいのに…」

「…陛下?」

「雨が止んだら…ビルといつて話もできなくなるのかしら?」

雨が止むと同時に結婚をされる女王はおひしゃつた。
悲しそうな笑みを浮かべて…

そして、

涙を浮かべて…

陛下？

貴女は私の気持ちを知っていて、
そんな事をおっしゃっているのですか…？

「…陛下は、結婚を望んではいないのですか？」

重い沈黙を破るように私の声が響いた。

「…望んでいるとするとなるなら、雨が早く止んでほしい」と、願うので

しうつね…」

その言葉を聞き、私は決意した。

「…陛下。」

「何？ビル？」

「外へ出ましゅう」

この時、私がこんな事を言わなかつたら、
あるいは、
この世界は変わっていたのかもしれない。

綱の糸（後書き）

最後に。

…猫よ、シッコまなこでくれー。
(気になつてたれこ。)

12時の約束

「ちょっとビル…どこへ行くの…？」

私はビルに手を引かれ、城の中を歩き回っていた。
すると突然、ビルは私の方へ向き直った。

「陛下。私は陛下を外に連れ出そうと思つています。…もし、陛下
が望むのならば…ですが。」

真剣な口調で告げられた言葉は、私の胸に深く突き刺さつた。

ねえ、ビル？

貴方は今、自分が何を言つているのか分かっているの？

それがどうゆう意味なのか、

それが私にとつてどうゆうものなのか、

貴方は、

私の気持ちを知つていて

そんな事を言つているの……？

「…分かつたわよ！行くわ！でも準備くらいさせちようだい！」

「…分りました。では、陛下の部屋の前で待つてします。」

…本当に、もう！

何でビルはあんなに落ち着きはらつてるのかしら…？

…バカ…よね？上手くなんていくはずがないのに…

「……。」

こんなに嬉しいなんて…ね？

「陛下？そろそろ準備は終わりましたか？」

「え…ああ、終わったわよ？今行くわ。」

「…陸下…」

ビルは私を見るなり飽きたように顔をそむけた。

「…何よ?」

「その格好で行くつもりですか?」

私はいつものピンクのドレスを着ていた。

「え? 駄目なの?」

「…アホですか?」

「まああ!」

ビルは一度ため息をついてから私を見た。

「陸下。本当に行く気あるんですか?」

とつあえず、桃色のワンピースに着替えた後、城を出る作戦を立てた。

「じゃあ、この後1~2時に門を出ればいいのね?」

「ええ。私は先に出て、城下町の『チヨシヤ』という雑貨屋でお待ちしています。」

空が明るくなってきた…

でも、もう私には怖いモノはないわね…

1~2時の約束（後書き）

そろそろシッコんでくれてもいいわよ、猫？
(気にしないでください。)

木の下で

女王は雨の中、城下町を歩き回っていた。

「…どうやら無事に門をぬけられたらしい。」

「…つもつーこの辺、よく分からないのよー」「うどいよー?」
が、道に迷つてしまつたらしい。

「…陛下? 隨分遅いと思つたら…何をしてこられるのですか?」

後ろからビルの声が聞こえてきて驚いた女王は

「わあ!」

前を通り過ぎようとしていた人にぶつかつてしまつた。
その人は灰色のフードをかぶり、顔の表情は見えないが、女王は何かに気付いたらしく、声をあげた。

「まあ! 貴方は…!」

「…そうゆう君こそ…」

「?」

「で、陛下。この方はどなたなのですか?」

とりあえず、雨をしのげる場所に行こうと話合つた三人は近くにあつた木の木陰で雨宿りをしていた。

「…え。つと…」

「明日、この女王と結婚させられた者だよ。」

女王が答えるよりも先にその人が答えた。

「……。それはその…どうしてここに?」

「僕もそここの女王と結婚する気はなかつたんでね。逃げて来たのさ。」

「まあ…庶民のくせによく言つわよ!」

「…悪いけど、僕は君程頭が悪くないんでね。」

「まあああー！」

「……陛下、落ち着いてください。……貴方のお名前は？私はビルです。

「僕かい？僕はチエシャだよ。ビル、とりあえず忠告しておくれけど、『陛下』と呼ぶのは控えておいた方がいいよ。城にバレてしまつからね。」

「……そうですね……では、何とお呼びしましょつか？」

「…………。」

名前を遠まわしに聞かれた女王は口をつぐんだ。
ちよつと間を置いてから、ゆうべつと言葉を発した。

「……名前は……ないの。」

雨上がりの虹

生まれた時から「女王」と呼ばれていた私には「名前」がない。実際にはあるのかもしれないけれど、呼ばれた記憶がないのは事実。

「だから、私には名前がないの… いえ、名前が分からないの」
ちょっとの沈黙の後、チエシャが口を開いた。

「王族は基本的に名前は必要ないからね、もう随分と前から名前はつけられなくなっているよ」

「… そうだったんですか…」

まだ降り止まない雨が音を立てている…。

湿った空気の中で三人は無言を保っていた。

「… あら? まあ…」

突然、女王は何かを見つけ声を上げた。

その目線の先には一輪の花が咲いていた。

「… アイリス… ですね。」

「… アイリス?」

「あやめの事だよ、女王。そんな事もしうないのかい?」

「な! 知ってるわよそれくらい…」

「… 本当かい?」

「… ……。」

「… そういうえば…」

一人の口喧嘩を止めるようにビルが口をはさんだ。

「アイリスといえば、虹の女神という意味があるそうですね。」

「虹? あの花が?」

「ええ。」

昔、イリスと言つ女神がいました。

彼女は他の神からの求愛を受け、困つたあげくに地上に降り立ちました。

その時に使つた橋が虹となり、その虹の麓に咲いた花を人々は「虹の女神」と呼び、崇めるようになりました。

「私が昔聞いた話ではこんな感じでした。ですから花言葉は『恋のメッセージ』なのだそうですよ。」

「へえ……」

「……なんとなく、陛下に似てますね。」

「え？」

「いえ、なんでもないです。」

そんな一人を遠巻きに見ていたチエシャは

「バカツブルめ……」

ぽつりと呟いていました。

雨があがり、日の光が射してきた頃。

「……では、これからは『アイリス』とお呼びしますね。」

「ええ。お願いするわ。」

女王に名前が与えられた。

翻上がつのはじ（後書き）

ええ…

私が『女王』だと知っている人のみ、ちょっと。
あとは申し訳ないのですが…幻滅させてしまうかもされません。ごめんなさい。

尚、「歪みの国のアリス」を知らない方にとっては、少し怖い部分がいるかもしれません。あらかじめ、『ご』承下さること。

では…まず、

ちょっと猫ー私に内緒でバルビューニュを行つたのよー…あいへん
になるから教えなさいっ…!!

…でないと、首狩るわよー…

それから、私はシンチトレではないと何度も言つたらわかるの…?

以上です。

もし、どうしても気になるようになら…評価の所にコメントだけでも書いて下せいで。できる限りで返信をさせて頂きます。

猫とアリス

「……はあ。何でこんな事になってしまったんだね？」「森の中。

チエシャはビルと女王アイリスの後ろを歩きながらため息をついていた。

「一時間前」

「そもそも行きましょうか？ずっとここにいては見つかってしまいます。」

「そうね。……貴方はどうするの？」

「……何がだい？」

「これから、一人で隠れ住むつもりなの？」

「……いや、それは勘弁してほしいな。」

「では、途中まででも一緒に来てはどうですか？」

「…………（断る理由がない）。」

「はあ。」

そんなチエシャの背後を全力で走つて来ている少女が一人いました。

「チエシャ猫！チエシャ猫でしょ！？」

少女はチエシャに追いつくと、チエシャの袖を引張りながら言いました。

「ちやうの！？」

「でもアリス……」

チエシャは自分よりも小さな少女を見降ろして呟きました。

「チエシャ猫の馬鹿！私も行くって言つたじゃない！何で先に行つ

「でもアリス……」

「私も一緒にいくよ！」

チエシャはアリスの肩に手を置き、アリスの目線まで身をかがめた。

「アリス。僕は君の猫だよ。でも、君は僕のアリスじゃない。僕のせいで君が傷ついてしまうなんて事はあってはいけないんだよ。」

アリスはチエシャから視線をはずし、うつむきながら答えた。

「…………嫌だよ。私だってチエシャ猫のアリスだもん！絶対に歩いて行く！」

「…………。」

「……アリス？まさか！あのアリス！？」

少し離れて様子を見ていた女王はアリスに駆け寄ってきた。

「……え？あ！女王様だ！久し振りだね！」

「本当にアリスなの！？まさかこんな所で会えるなんてっ！」

和氣あいあいとしている二人をよそに

「…………？」

「…………？」

ビルとチエシャは顔を見合せていた。

「わたくし私とアリスとは幼馴染みなのよ。もう3年以上会っていなかつたけれど。」

「うん！もうそんなになるねえ！でもまさか女王様、本物の女王様だとばずつと思ってなかつたよ！」

とりあえず、ずっとそこで話している訳にはいかなかつた4人は歩きながら話をしていた。

「でも、女王様。ここにいても平気なの？城下町ではもう結構な話題になつてるよ？」

「まあ！そうなの！？」

「……え？」

そこまで無言で一人の聞いていたビルが急に険しい顔つきになり、少し遠くの方を見た。

その先には国の中があった。

猫とアリス（後書き）

大変に申し訳ございませんが、ここからは私、女王と化します。カナリの確率で意味が分からぬとは思いますが…温かい心で見守つてやつて下さい。知りたい場合は今回もコメントにて返信させて頂きます。

…何で私が「チエシャ猫のアリス」なんて書かなければならぬよ！？

いくら仕方なかつたとはい、アリスは私のアリスよ！

そこはちゃんと理解しなさいよね！猫！

それから…何で私は全国的に「ツンデレ」化させられてしまつているよ！！

私はツンデレではないのよ！！

秘密の家（前書き）

今更ですみません。

今回気付いたのですが、「一部キャラを」と初めに申しましたが、「全てのキャラを」になってしましました。

「歪みの国」のアリスのファン、ナイトメア・プロジェクトの皆様、本当に申し訳ございません。

この作品は「歪みの国」のキャラを全面に使って構成されています。

今回からも又、あらかじめご了承の上、この作品を楽しんで頂ければ幸いです。

「ちょっと待つて下せーーー！」

もうすぐ国の境といひどりでペルが叫んだ。

「え？ 何？ どうしたの？」

その声にアリスが反応した。

「この先に行くのは危険です。もう、きっと私達の事は国中に伝わつていいでしょう。」

「なるほど。あそこまで行つても無駄と言う訳だね。」

「じゃあどうすればいいのよ！？ 今から戻つても噂は流れてしまつているのでしょうか？」

「どうしようもないじゃ ないか。 ここで何か考えなければ連れ戻されるだけだよ。」

「だからーーーどうするのよーーー？」

「二人とも、落ち着いてください。今、ここで争つっていても仕方がないでしょー。」

「待つて！ 私、いい考えがあるかも！！」

一連の流れを遮るようにアリスが口をはさんだ。

「…どうするんだい？ アリス。」

アリスは人差し指を立てながら、少し嬉しそうに答えた。

「秘密基地わたくしたちのいえでしばらく過ごすのはどう？」

森の奥深く進んだ所に大きな大木が一本、飛び抜けるように生えていた。

その上には、小さな小屋のような家が一軒、静かに佇んでいた。

「ここのことだつたのね… まさかそのまま残つてるなんて…」

大木の上の家を見て女王が呟いた。

それに対してアリスは、より嬉しそうに答えた。

「うん！でも、さすがに中は掃除しないといけないみたいだよ。」

「…ここは…昔、陛下がアリストと過ごした秘密基地なのですか？」

「…ビル…」

「あ、すみません…まだ慣れてないので…」

「大丈夫よ。ここでは『陛下』でも。だってここは本当に私わたくしとアリスしか知らない場所ですもの。」

「そうだよね！ここだけは誰にも教えてなかつたもんね！」

嬉しそうにはしゃいでいる一人を見ながら

「そういうえば…チエシャ猫。何で君は『猫』なんですか？」

「…アリストが猫が好きだからだよ。」

「…なるほど…」

チエシャ猫とビルは素朴な会話をしていた。

秘密の家（後書き）

後書きも又、遅いのですが…

「アイリス」の名前についてです。

何故、私が女王に「アイリス」と名付けたかと言いますと、ある日、「アリス」と検索しようとしました際に、誤つて「アリス」と検索してしまいました。

その際に出てきたのが花の「アイリス」（あやめ）でした。これは使える！と思つて使つてしまつた次第です。

単純ですね。

でも私はそんなヤツなんです。

本当に皆さん、ごめんなさい…！

私は「歪みの国のアリス」が大好きです！！！
でもまだ「包帯女」止まりです！
何で私は女王を知つているんだああ…？
…すみませんでした。

「うわあ… やっぱり埃だらけ…でも本当にそのままだね…」
秘密の家に入つてからのアリスの第一声。

家の中は埃だけで全てが白い世界。

足を踏み入れるとその足跡がつくくらいの汚れ様だ。

「さて、まずは掃除ね！いくらなんでもこのままでは住めないものね！」

「陛下…なんだか楽しそうですね。」

「え？ そうかしら？」

そう言つそばから女王は箒を片手に踊るように掃除を始めた。

「君は一体何でアレを好きになつたんだい？僕には到底、理解出来ないね。」

そんな女王を見て、チョシャ猫がビルにしか聞こえないような声で言った。

「…え？ 何で…」

「勘はいい方でね。」

「…何ででしょうね…。」

「ねえ、女王様。女王様つてビルが好きなの？」

楽しそうに先に掃除を始めていたアリスが突然、女王にしか聞こえない声で話しかけた。

「な…！／／／」

「私さ、勘はいいんだよー！」

「…。」「…。」

女王はうつ向いてゆづくりと頷いた。

「やっぱり？じゃあ、ビルはどうなの？もつ聞いた？」

その言葉を聞き、女王は勢いよく顔を上げた。

「そんな……聞けないわよ！」

「どうして？そんなに仲がいいのに？」

「私がそんな事を言つたら……」

女王は部屋の隅で埃を被つていた鎌を見つめた。

「あ……ごめんなさい……！」

「これは、どうしようもない事だから仕方ないのよ。」

そう言つた女王の顔は寂しそうに笑つていた。

大切なもののほど

傷付けてしまいやすい。

大切だから

自分の側には置いておけない。

矛盾した世界だから
愛する事が
尊いんだ

鎌と筆（後書き）

鎌：何で鎌なのかって？

次回、書いておくつもりです。
でも、予定は未定。

ははは（笑）

甘い物の食べ過ぎに注意！

頭がおかしくなりますよ。（誰ー？

最近聞いた話ですと…

「あとがきが面白いんだよね～」

だ、そうです…

嬉しいような…

悲しいような…

更に言ひうと、

あとがき書く方が楽しいんですよ。

なんとなくですよー！！！

そしていつも、

本編より長いんじゃないかつて…
ひやひやもんです。

ほらね、甘いものは食べすぎちゃいけないんです。

文体がバラバラです。

更に、

女王である私が

「猫が好き」って

三三二二一五九六七九七九一五...

夢の狭間で

4人が掃除を始めてから1時間。

外はもう日が沈んでいて空はオレンジ色に染まっていた。

家の中はといふと、最初の埃だらけな家からは想像ができない程綺麗になつていた。

中にはテーブルやイスの他に一応はベットも置かれているらしい。木枠の窓の傍には例の鎌が立てかけられていた。

「やつと綺麗になつたね。でも、女王様。そろそろ行かないと日が暮れちゃうよ？」

「ああ！ そうだつたわね！」

女王は手に鎌を取り、大きなバスケットを手にしたアリスと共に家の外へ出ようとした。

「どこへ行くのですか？」

「あ、ビルも一緒に来る？ 今の時期だと… ちょっと届かないかもしれないから…」

「……はい？」

外に出て数歩いた所。

そこにはたくさん実をつけた桃やさくらんぼがあつた。

「…すごいですね…」

そんな木々を見上げながらビルが呟いた。

「もう少しするとあつちの梨も実になるわよっでも、どうしても手が届かなくて…」

「なるほど。それで鎌なんて持つてきたのですね？ 大丈夫ですよ。我なら届きますから。」

「まあ！ 私が小さいとでも言いたいのー？」

「まあ… そうですね。」

空は、だんだんと藍色に染まつていった。

「ねえ、 チェシャ猫。 本当はビルも…」

家に残つていたアリスは窓の外を見ながらチェシャ猫に話しかけた。

「ああ。 そうだよ… 女王もなんだろう?」

「…うん。 … 何でだらうね? おかしいよ…」

「アリス。 現実はいつでも残酷なものだよ?だから夢を見る事ができるんだよ。」

「…私たちは、 夢を少しでも長く、 見せてあげようね…」

暫くして、 扉の開く音が聞こえた。

「ただいま! アリス!」

「あー…おかえりなさい!」

終わらない夢なんてない。
そんなの分かりきつたこと

でも、

信じるしかなかつたんだ。

夢の狭間で（後書き）

… 眠いです。

一日一回更新はきついです；

今日なんかもうギリギリ…

何を打つているのかさえ分からんくなつてきました；

…でも、あの人、「が」をツツこまれなくて良かった（笑）

「も」って書いてましたから；

あ。今日はこの辺で。

「とじるで……この家にまつまでこもつもりなの？あまつ頃くじても見つかってしまつわよ？」

ロウソクの火の光で照らされた部屋の中。

4人は床に座つて話していた。

「それなんですが……しばらくここにいた方が逆にいいかもしけません。」

「え？何で？」「くら誰にも教えてないつて言つても、お城で捜索してるんだよ！？見つかっちゃうよ！」

アリスのもつともな意見に対しビルは：

「私の予想では……城の人々はきっと国外で私達を捜索していると思うんです。」

こう切り返した。

「なるほど。灯台もと暗しつて訳だね？」

「ええ。そういうところにいる方が安全かと……」「

「それはいいとして、君らはこのまま逃げ回つてどひするつもりなんだい？最終的な目的はあるのかい？」

部屋の中が静まり返る。

ロウソクの炎が揺れる音が聞こえた。

「……無いのかい？」

「……ある…けど、言えないわ。」

また、しばらくの沈黙…。

「あーえつと！ほら！それはまた今度でいいじゃない！どっち道ここにいないといけないんでしょ！？それよりー今日は遅いからもう寝ましょうよ！」

アリスはそう言つと立ち上がった。

「明日は色々とやる事があるからー早く起きてねー？」

「分ったよ、アリス。今日はもう寝ることよつ。じゃあ、ビル。僕

「うーーーで寝ることじみつか。」

「そうですね。……では……」

「あーーーよー！ベット使つてくれて！私たちは外に行くからーーー！」

そう言つて、アリスは女王の手を引いた。

「行こう！女王様！」

「え？あ…ああ！そうねー！」

二人は家を飛び出して行つた。

残された一人は…

「…ビル。僕らって、時々邪魔にされてるよつて御うのだけだべ…」

「…貴方もでしたか…」

また、素朴な会話をしていた。

家の外。

そこからほど遠くない所に大きな穴の空いた木があった。

その中に女王とアリスがいた。

「ここも全然変わってないわね…忘れちゃいそつだつたけど。」

「ね！……女王様。女王様の目的つてやつぱり…」

女王は静かに額くと口を開いた。

「伝えるだけは、伝えたいな、と思つたのよ。一方的なら、ビルに何の危害も出さなくて済むから。」

「そつか…うん、いいね…でも、きっと…

「え？」

「あー何でもないよー!?…そろそろ寝よつー…」

「そうね。おやすみ、アリス。」

良こ夢を。

古邨たかむら トト（後書き）

…お待たせしました！

もう10時半です；

ごめんなさい！！でも、頑張りました（笑）

今日は時間がないのであとは短めに！

わいふと

えー。

今回はですね、一部、影響された部分がいるんですよ！

猫とビルの痛々しいところが！（笑）

だって…内職なんすもん…w

気になりますか？

気にしないでください！

昔の思い出

冷たい空気を感じる…

ポツポツと軽快なリズムが聞こえる。

雨の匂い

「一応は予想はしていたけれど……まさかここまで見事だとはねえ……」

女王がぼやくように言った。

「ま、仕方ないよ、こればっかりは……」

雨のせいで今日の予定がなくなつた4人は家中で雑談をしていた。「アリス。もし予定があつっていたとしたら何をするつもりだつたんだい？」

「ベットはもう一つは必要でしょ？ 幸いここには材料がいっぱいあるし！ あとは椅子ね。ずっと立つたままじゃ疲れるでしょ？」

なるほど、と言つてからチエシャ猫は何かに気づき、そういうえば、と続けた。

「……ずっと気になつっていたんだけど……この家は一体誰が建てたんだい？ まさかアリスと女王だけで建てた訳ではないだろ？？」

そこで一回会話が途切れる。

数秒経つてから女王が答えた。

「……ずっと前の事だから、あまり覚えてないけれど……私達がまだ小さかつた時に私達より3つくらい歳上だったかしら？ 男の子と一緒に建てたのよ。」

「……その人は今、どうしているんだい？ もし、その人がその事を言つてしまつたら……」

そこで、今まで黙つていたビルが口を開いた。

「大丈夫ですよ。その心配はありません。」

「何でだい？」

チヨシヤ猫の質問にビルは微笑し、

「なんとなく、ですよ。」

そう一言答えた。

それからじしまくして、女王がいきなりあつーと声をあげた。

「どうしたんですか?」「

「……ちよっと、確認しないと……」

そう言つと、女王は家を飛び出して行った。

「……陛下?……あー」

ビルも何かに気づき、女王の後を追う。

「……何だらうね?まだ雨降つてゐるのに……一ああーーー!」

不思議そうにしていたアリスも声をあげた。

「どうしたんだい?アリス。」

「忘れてた!……もう遅いか……」

そう言つてアリスは窓の外を見た。

「陛下!」

ビルは廊の中を走り回つていた。

「ビル!ほらみなさい!やつぱり私が取つたわよ!」

「まさか、陛下に先を越されるなんて……思つてもみませんでしたよ。」

女王の手には、小さなボールがあつた。

「約束は約束よーちゃんと守りなさいね!」

「分りましたよ、陛下。」

「で、君らは一体何をしていたんだい？」

今まで何の意味も分からぬまま家にいたチエシャ猫は3人に言った。

「さつきの男の子って私だつたんですよ。」

「そうそう！で、昔遊んでた時にボールをね、木に引っかけちゃつて取れなかつたの。」

「で、それを取つた人のお願いは聞かなきゃいけないって言つてたのよ。」

3人はこう答えた。

見事なチームワークにチエシャ猫は啞然としている。

「そういえば、陛下の願いつて何ですか？」

「え？…そのうち叶えてもらつわ。」

昔の想い出（後書き）

今日は長めに！

いつもこつこんなのに付けて下さり、ありがとうございます
！！

最近思つたんですけど、これって何か日記化しますよね？
すみません；；

正直、あとがきって何のためにあるのか分かんないんですね。
でも、楽しいんですよ！（笑）

いや、今日は何故か雨が降つてしまいましてね。
電車で学校から帰らにゃならんかったのですよ！

んでその時にコレを書いてたんですけどね、
何しろ文字がメールより明らかに多いですからね！

すんごい変な目で見られましたよ；

見られたら恥ずかしいじゃありませんか！

だから必死で隠してたんですけど、余計に変な目で見られました；；

さてさて、

このThe hoped oneもそろそろ作者としては面白くな
つてきました！

腐れ！青少年よ！（笑）

これからは恋愛要素をバシバシ入れていきます！
宜しくお願いします！

迷いと本音

昨日とは「うつ」て変わり、今日は晴天だった。

でも、なんとなく体が重い。……

「陛下？顔が赤いですよ。どうかしましたか？」

昨日やる予定だった『必需品ついで』を猫と一緒にしていたビルが声をかけてきた。

「え？ そつかしら……？」

「あ！ 本当だ。女王様、大丈夫？」

アリスも心配そうに尋ねてくる。

「え？ 大丈夫よ。これくらい……！？」

いきなり体が宙に浮いた。

それと同時にビルの顔が近づく。

「陛下。昨日の雨で風邪を引いたのではないのですか？ 今日は休んでいて下さい。」

自分がお姫様だつこされているのに気付き、私は赤面した。

「な……一ちよ、ちよつと…下ろしなさいよつ！ 恥ずかしいじゃな

い！」

「そうですか？ ジャあ……」

私は一回地上に下ろされた。ホツとしたのもつかの間、また体が宙に浮いた。

今度は背中が近づく。

「おんぶなら、恥ずかしくないですね？」「

そつ言つて彼は家に向け、歩き始めた。

「もう…いいわよ…」

諦めて、彼の背中に身を預けた。

懐かしいような感覚、……。

昔はもっと素直に色々な事ができたのに……。

今ではそれさえも難しい。

「なんか懐かしいですね、いつもの。」

まだ少しぬかるんでいる地面を歩きながら彼は話掛けってきた。

「どうやら私と同じ様な事を考えていたみたいだ。

「そうね。でも昔みたいに私は怪我ばかりしないわよーー?」

「そうですか、… そうですね」

ビルは微笑しながら答えた。

「何がおかしいのよー!」

「いえ、何でもありませんよ」

そういうじでいる内に家に着いた。

私はベッドの上へ下ろされた。

「じばりへの間はひやんと寝ていて下さいね。何かあつたら呼んで下さい」

「待つて!」

用なんてないのに引き止めてしまつた……。

ビルはこちらに向かつて来て、隣に腰を下ろした。

「何ですか?」

どうじょい……

頭が何かに触れた。

「つーーごめんなさいーー!」

気がつかない内にビルに寄りかかっていた。

思わず下を向く。

きっと顔、真っ赤だわ……

「大丈夫ですよ。辛いなら寄りかかって下せつても」

「いや、でもつ……ーー!」

また、体が傾いていく。

「我慢するのも昔と変わらないですね」

そう言いながらビルは笑つていた。

「何よーもうつー!」

すねたフリをしながら斜め上のビルの顔を眺める。

そういうえば、昔からビルの事が好きだったのだつけ……?

今では理由なんて覚えてないけれど。

まさかこんな事になるなんて……

私と会わなかつたら、貴方はもつと幸せな人生を送っていたのかしら?

「……ごめんなさい」

「どうしたんですか?陛下」

「ビル、あのね……ずっと昔から」

風邪をひいて、

頭が回らなかつたから

本当は言いつもりじやなかつた……。

「好きだったの」

迷いと本音（後書き）

…フ。

何ですか？

私が何かしましたか？

この間、忠告したはずですよ？

『腐れ！青少年よ！』と。（笑）

いいじやあないです。

ちょっとばかし展開が早くつたつて！

どつち道腐る事には変わりないし～

何より楽しいし～

あははははははは…！…！

すみません、壊れています…。

いやあ、現実にそういうのがないと

こっちの方に突っ走るしかないんですよ（泣）

あ…1日一回投稿できなかつた…

ま、いいですよね！

今日、2回すればいいんだ…！

キツイなあ…

頑張ります

未来への一步

「……陛下？」

私は思いもよらぬ彼女の発言に耳を疑つた。
手に入るものではないとずっと妥協していたのに……
頭が混乱する。

そんな夢みたいな状況があるはずがない……。
でも、今、彼女は私を好きだと言つた。

「え？……ビル？」

思わず彼女を抱き締める。

「陛下、ずるいですよ。私よりも先に言つなんて」

「え？」

「私だつて、ずっと陛下の事を想つてきました。本当は言ひつつもつ
なんてなかつたんですけど…私は陛下を愛しています」

「……本当に？」

「ええ。…信じられませんか？」

何故だらう?

とても愛しい。

ずっとここのままでいたい…。

「うつ…ビルの馬鹿！」

肩越しにでも彼女が赤くなっているのが分かる。
本当に愛しい。

「照れている陛下も可愛いですよ」

「うつ…もう…離してよつ…ビル！？」

私はさつさよりも強く彼女を抱き締めた。

「嫌です。絶対に離しません」

「でもつ…風邪がうつっちゃうわよ…」

「陛下の風邪なら、構いませんよ?」

「もう…いいわよ…」

そんな彼女といふと、本当に、今の状況を忘れる事ができる。

でも…

「…陛下。一つ聞いていいですか？」

「え？」

「この先、ずっとこの生活を続けていくのは不可能です。いつかは必ず見つかってしまいます。その時、陛下はどうしたいのですか？もし、城に戻るという選択をした場合は、私は姿を消さなければなりません。そして、違う選択をした場合、陛下も一生逃げていかなければならなくなります。それでも、いいのですか？」

彼女は、一つ間を置いてから答えた。

「…いいわ。ビルが一緒ならどんな人生だつて」

彼女の那一言は私の心に大きく響いた。

未来への一步（後書き）

見返してみて…

決めました。

これは期間限定ものになります！

夏季限定です！

ヤバイです！

以上に恥ずかしいっ！／＼／＼

なんなんだ！？このあり得ない展開はつ…！

あ、～～！！！！

…嘘です。

期間限定にはしません。

でも、笑わないで下さいね？

「で、ビル。今まで何をしていたんだい？随分と遅かつたじゃないか」
「いえ、……ちょっと」
「分かりやすいな……。
ふつ。バカツブルめ……。
「わかつてゐよ。女王と何かあつたんだろ？～例えば、皆白されるとか……」
「……貴方は、本当に勘がいいんですね
「えつ！～？ そうなの！？」
「で、どうしたんだい？ 断つたりはしていないんだろう？」
「……まあ」
「本当に分かりやすい。
「ビル！おめでとう！」
「えつと…ありがと'ひ'いれこます……」
「……む。
「で、ビル。女王は今、どうしているんだい？」
「ちゃんと寝てこますよ。ちよつと熱があつたみたいですから」「え？ 何で分かるの？」
「……それは……」
「アリス。そこはシッコんじやうけないよ」「何で？」
「羨ましくなるからだよ。」「そういうものだよ」「そうなんだ？」
「さあ、もう少しで終わるからやつてしまおつ」「やうですね」
「本當！」。

ノロケは勘弁してほしいよ。

「はあ。」

「どうしたの？ チェシャ猫？」

「何でもないよ、アリス」

次の日

「で、全部終わつたのはいいものの……」「

「やる事、なくなつちゃつたね！」

「陛下は、もう体の方は大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫みたいよ

全く。

こんなバカッフルと一緒になんて。

「アリス」

「ん？ なあに？」

「君は『僕のアリス』になつてくれるかい？」

「え……う……ん……」

僕らも影響されてしまうだろ？

ふん。

別に認めたから書いた訳じゃないのよー…?

あまりにもネタが無かつたからよー！

正直、キツイのよー

あー！もうー

リアルに恋しかったダメですね；

赤い糸

「暑いわね……」

梅雨が明け、強くなつた陽射しの中。

女王は一人、木漏れ日の下で咳いていました。

「陛下？何をしているのですか？」

そんな女王を見つけ、ビルが声を掛けた。

「え？ビル！？何でここにいるの！？」

「それはその……たまたまですよ」

と、言いつつ、実はずっと探しまわっていたビルは額に少し汗がにじんでる。

「で、何をしているのですか？」

「…………何でもないわよ？」

10秒位経つてから返事が返ってきた。

「何なんですか、その間は……何か隠していませんか？」

「なっ！何にもないつたら！」

ビルは焦つたように返事をする女王に一言。

「浮氣、ですか？」

それに対し女王は顔を真つ赤にしてうつ向いた。

「本当に……そなうなんですか？」

「違うわよ！……もう！いいからついて来ないでよーーー！」

「…………陛下？」

ビルは後ろから女王を抱き締めた。

「……ちよ……！」

「行かないで下さい」

「だからー違つて言つてるじゃないー…………もつー！」

「……何が違うんですか？」

「それは……」

そこで女王は口をつぐんだ。

数秒の後。

「絶対に…笑わないでよ?」

そこには一本の小さな木がありました。

周りの木より小さく、その枝には小さいリボンが結ばれています。

「……これは?」

そのリボンに書かれていた文字を見て、ビルが女王に尋ねた。

「もう!だから嫌だつて言ったのよ!」

女王は顔を赤らめながら答えます。

そのリボンには

『ビルとずっと一緒にいられますように』

こう書かれていました。

「陛下が書いたのですか?」

女王は返事をする代わりに頷き、そのまま後ろを向いた。

「陛下……」

「アリスがそうしたら願いが叶つて言つてたから……やつてみただけよつ!」

そんな女王にビルはそつと近付き、また後ろから抱き締めました。

「大丈夫ですよ、陛下。私は陛下が望むのならずつと貴女の傍にい

ます。逆に、もう放したりしませんよ?」

「もう!そんなんじゃないって言つてるじゃない!」

「……ですか?」

「へつ!分かつてるくせに!..」

そこは、優しい風が吹いていました。

赤い糸（後書き）

え？キャラが微妙に変わつてないかって？

…そうですか？

私のイメージの中ではずっとこうでしたのが？いや、そうさせられてしまつていきましたが？

全部謎問形だつて？

気にしてない方がいいですよ？

貴方…ビルじやないですよね？

変な質問するなつて？

ま、いいんじゃないですか？

え？

私のリアルな恋についてですか？

あれば自虐に近いですよ？

なんかだんだんおかしくなつてきましたね？

また文句を言われそうですね…？

勘弁してくださいね？

あればイタイですよ？

真面目に、ですよ？

皆さん、こんな私を許してくれますか？

ごめんなさい！；

「そりいえば、夏と言えば毎年近くの湖に行つてたよね！」

初夏。まだ涼しさの残る朝。

彼らは今日の予定を立てていた。

「そりいえばそうだつたわね！ねえ、今日行つてみましょ「うよー。」

「そうですね。たまにはそうゆうのもいいかもしません」

皆が行く気になっている中、一人、チエシャ猫だけあまり乗り気で

はなさそうだった。

そんなチエシャ猫に気付き、アリスが声を掛ける。

「どうしたの？チエシャ猫」

「アリス、湖に行くのかい？」

「うん。そりしそうと思つてるけど……チエシャ猫は嫌？」

「…………。」

「まさか……泳げない、とかじゃないでしょ？」「

女王のその言葉にチエシャ猫は声を張つた。

「そんな訳ないじやないか」

「チエシャ猫？無理しなくともいいんだよ？」

「大丈夫だよ、アリス」

そう言つたチエシャ猫の顔は少しむわばつていた。

「で？どこが大丈夫なのよ？」

そこは美しい湖でした。

水は透き通つていて、蒼く染まっています。

その水の中から遠ざかる様に、一人、チエシャ猫が三人を眺めていました。

「僕はね、泳げるけど水は苦手なんだよ

「なによ、その屁理屈」

「本当に猫みたいですね、水が苦手なんて」

「えー？ そうなら先に言ってくれればよかつたのに」

「アリスがここへ来たかったんだろ？ 僕はアリスが望むのならどこへでもついて行くよ？」

「……ありがと…」

そんな二人を見ていた女王は…

「なんか……ちょっと悔しいわね」

「…何ですか？」

「猫なんかにアリスを取られたって氣分よ」

「……陛下」

「何？ ビル」

「私も、ですよ。アリスに陛下を取られた氣分です」

「え？ いや、でもそれは……」

「陛下。もうアリスにはやきもきを妬かないで下さい」

「な！ そんな事を言われても……」

「それに、陛下には私がいます。私では不服ですか？」

「…そんな訳ないじやない」

「では、もう彼らの事は放つておきましょ？」

「いや、でも……」

その瞬間、一人の距離が急激に縮んだ。

「ビル！ 今、キ… // /」

「あんまり私を甘く見ないで下さいね、陛下」

「// // // ビルの馬鹿！」

何か？

だって今日は雨が降ったのに会えなかつたんですねもん。
そりや、じつちにも走りたくなります。

私は所詮、妄想の中でしか生きられない女ですよ！

そこ！ずっと男だと思ってたって！？！？

別にいいもん～！

逆に口説いちやうから

執事じやないけどね（笑）

え？

気にしてたひ負け、ですか。

過去の理由

日が傾き出した夕方。

3人はまだ湖畔にいた。

アリスと女王は遊び疲れて眠つてしまつていてる。

そんな一人を見て、ビルとチェシャ猫は話していた。

「水は……大丈夫になつたのですか？」

「ああ。アリスのお陰で少しさね」

「……………ですか」

いつもの事ながら、話しあは続かない。

少しの間があつてからビルが続けた。

「そういうえば、チェシャ猫とアリスってどこで知り合つたんですか？」

「きつと君らが城に閉じ込められて間もなくだよ。僕は親を失つてね、路地裏で小さくなつていた僕をアリスが拾つてくれたんだ……」

「……………そうだったんですね」

「ビル、いつも気になつていたんだけど……何で君はいつも敬語なんだい？」

「私はそうゆう身分なんですよ」

特に表情を変えないまま、一人の会話は続く。

「どうゆう身分なんだい？」

「私の両親は……この国の反乱者なんですよ。私は一人に捨てられました。反乱に反対する、言うことを聞かない役立たずとして。そして、城に拾われたんです」

「城の人間は、その事を知つていたのかい？」

「いえ。陛下以外には言つていませんよ。陛下に止められました。言つたら追い出されるだろうと」

「それは、賢明な判断だったと思うよ。あの女王にしては。でもビル、女王は君の事情を知つているんだろう？なら別に気にする事ないじゃないか」

「私が嫌なんです。陛下にそんな下げ染むよつた扱いをしたくはありません」

「君らは恋人なんぢやないのかい？」

「え？ そうですけど、でも……」

「君は良くても女王はどうなんだい？ 僕は君に敬語ではあまり話されたくないと思つてゐるよ」

「……ですか」

「もう僕らは共犯者だろ？ 仲間なんだから、別にこじだわらなくてもいいと思うよ」

「分かつたよ。これからはなるべく敬語は使わない事とするよ……」

「ただ」

「ただ？」

「陛下にさうするのは難しいかもしないな」

それからしばらくした後、アリスが目を覚ました。

日はもうすっかり暮れていた。

「おはよー……」

アリスが目を擦りながら起き上がる。

「もう夜だよ、アリス。家に帰ろ？」「うん。行こう、チエシャ猫。あれ？ 女王様はまだ寝てるの？」

「そうですね、先に行つていて下さい」

「うん。分かつた」

二人が去つてから少しして、ビルは女王の横に腰を下ろした。

「出来るわけ、ないですよ」

「敬語の話？ 別に私は嫌ではないけれど、何で私にだけ駄目なの？」

すぐ隣から、当たり前の様に女王の声がした。

「陛下？ 起きていたんですか？」

「ええ。随分と前から。猫にあの事言つたでしょ？」「…

「… そんなに前から起きてたんですか」

「猫がアリスに拾われた辺りからね。で、何で私には敬語なの？」

「……貴、町に出て、城に戻された時の事、覚えてますか？」

「ええ」

「あの時、私は陛下に敬語を使つていませんでした。それを聞かれてしまつて、私はしばらく陛下に会えなくなりました。……あの頃から、陛下が好きだつたんですよ。陛下に会えないのがどうしても嫌で、日頃から敬語を使う様にしてきました。だから、ですか。敬語を使わないと陛下を失つてしまふ様な気がして……嫌なんです」

女王は微笑みながらビルの顔を見た。

「馬鹿ね」

「そうですね」

女王は起き上がるビルの肩に頭を預けた。

「私なんて、もっと前からビルが好きだつたのよ？出会つた時からね。」

「そりだつたんですか？」

「馬鹿……でしょう？」

「いえ、嬉しいですよ」

「でも、今はそれ以上に好き」

「……陛下？ひょつとして、寝惚けてますか？」

「さあ？どうでじょうね」

過去の理由（後書き）

愛する人ができました。

でも、なかなか会う事ができません。
会いたいです。

でも、会おうと思つて会えるような相手ではありません。
あとがきにこんな事を書くはめになるとは…
なんとなく、誰かに聞いて貰いたいんです。

私はまた懲りもせず吹奏楽部員です。

ちなみに副部長なんてやつちゃつてます（笑）
で、ここで問題が発生しました。

「楽譜を中学校から借りてこい」
そう先生、先輩に言われました。
でも、ですね。

私の好きだった後輩はまだそこにいます。
色々な情報が私の耳に届きます。

あの人は、

私を笑いの種にしているようです。

私には今、好きな人がいます。

名前も、高校も分かりません。

… 今回はもう長いので、次にまた、読んで貰えますか？

新たな旅立ち

それはある日の夕暮れ。

突然、外へ出ていたアリスが走つて家の中に飛込んできた。

「どうしたの？」アリス。そんな走つて……

「皆一来た！ 静かにしてつ！」

しばらくすると外から声が聞こえてきた。

「なあ、やつぱりここらにはいないんじやないか？」

「だよな。いくら他国にいなかつて陛下がこんな森の中にはいるなんて考えられないぞ」

「仕方ない。国王の命令だからな」

「そうだな。あっちの方にでも行つてみるか？」

そう聞こえ、足音は遠くに消えていった。

「……思つた以上に早かつたですね」

壁に耳をそばだてていたビルが足音がなくなつたのを確認し、言つた。

「こつなるともひ、時間の問題だよ。すぐにここを出た方がいい」

「そうね。今夜にでも出発した方がいいかもしれないわ」

皆、いつになく真剣な面持ちをしていた。

4人は少し相談をしてから、できるだけ物音を立てないように準備を始めた。

夕暮れが過ぎ、空に闇が広がる。

その頃になると、4人は準備を終え、出発をするため外に出た。

辺りには地面を照らすよつな物は何一つない。

空には雲がかかり始め、月明かりもそこまでは届かない。

暗い夜道を4人は歩き出した。

「ねえ、この国を出て、どこへ行くつもりなの？」

無言に耐えられなくなつた女王が口を開いた。

「そうですね…他国に逃げたとしても私達の事は伝わつてゐるでし

よつし……」

「私達はともかく、女王様は何かしないとバレちゃうね……」

「男装でもしたらどうだい？」

それを聞いて憤慨している女王に、ビルは

「それ、いいかもしませんね」

笑顔で言つてのけた。

「へえ……猫のフードの中つてそんなだつたのね」

今まで猫の着ていたフードを被りながら女王は呟いた。

その目線の先には少し幼い感じのする男の子が立っていた。

「だから嫌だつて言つたんだ」

男の子はそう言つた。声からすると恐らくチョーシャ猫の様だ。

「身長と顔が合つてないわよ？」

「大きなお世話だよ」

「正直言つと言動も合つてないよね」

アリスにもそう言われ、チョーシャ猫は黙つてしまつた。

「さて、陛下……ちゃんと男装しましょつか？」

そう言われた女王は少し躊躇いながらもチョーシャ猫のフードを着た。髪は中に入れ、完全に見えないようにする。

「暑い……」

「……本当にそれだけでもチョーシャ猫に見える……」

そう言つたアリスに、チョーシャ猫は

「それは誉めているのかい？アリス」

そう言つた。

新たな旅立ち（後書き）

二十九

えつと、ですね

この間の後書き、無かつた事にしてくれませんか？
かなりイタイんで、もう無かつた事にしたいです；

あ、ちなみに、ですね。

和田田井が今どう
つてか全く勉強してないんですね!!

夏休みは部活したいんですよ！

だから平均点は取りたかったんですよ！

誰か、助けてくださいよっつ！！！！！！！！

別れ

4人は無事、国境を越え、国を出た。

国外には一面の草原が広がっていた。

「…すごい！国外がこんなになつていていたなんて！」

「アイリスは他国に何度も行つた事があつたのではなかつたのですか？」

はしゃいでいる女王を横目にビルが聞いた。

「いつも馬車の中だもの。外の景色なんて見た事は一度もなかつたわ」

女王は遠くまで広がる草原を見渡しながら言った。

「…あの、アイリスさん？何かね、チエシャ猫が言つてゐるみたいで変な感じがするんだけど……」

しばらくの沈黙の後、アリスとアイリスとビルが一齊に吹き出した。

「失礼だな。僕とその変なのと一緒にしないでくれ

「私だつて願い下げよっ！」

そうして笑いながらも隣国の町に着いた。
そこは小さいながらも活氣のある町でした。

あちこちに散らばるようにしてお店が立ち並んでいます。

「やあ！久しぶりだねえ、他国から人が来るなんて！」

「観光かい？珍しいね、今年の夏前から他国から人があんまり来なくなつたんだよ。ゆつくりしていきな！」

行き交う人々に声をかけられながら歩いていた4人はあるものを見つけました。

「まさか…そんな……」

女王が見ている先には

『wanted』の文字。

そしてその上にはビルの写真がありました。

「いたぞ！あそこだつ！」

向こうから兵士と思われる何人がこちらに向かってきているようだ。

「大変つ！早く逃げないと……！」

アリスはそう言つたが、女王はアリスの手を掴み、首を振つた。

「え…？」

「アリス、元氣でね」

女王はアリスの手を放し、ビルを掴んで走り出した。

「…えつ…待つて！」

アリスの声に返事を返す事もなく、女王は走り続けた。

「アイリス？何をしているのですか？」

その隣で走つていたビルが女王に問掛けた。

少しの間を開けてから女王が返事をする。

「あの二人は追われている訳ではないわ。こうした方がアリス達にとつてはいいのよ」

「……なるほど」

そうして二人は町を抜けていった。

別れ（後書き）

そろそろ終わりです！！！！

只今、異常に腰が痛いです！！！！

誰か助けて下せーっ！！！！

「また、ふりだしに戻っちゃったわね……」

二人は町外れの路地裏にいた。

薄暗いそこには何もなく、人のいる様な雰囲気はなかつた。

「でも、後退はしていません。大丈夫ですよ」

「……でも、こんな事になるのなら……」

そこまで言つて女王は足を止めた。

「……嘘……」

「……王様？」

その瞬間、女王は後ろから一人に腕を掴まれ、ビルは後ろ手にされ、捕まつた。

一人の目線の先には赤いマントを身に纏つた王様が立つていた。

「女王、探すのに苦労したよ。しかし無事でいてくれて何よりだよ」

そう女王に笑顔を向けて王様は言つた。

「安心しなさい。全てなかつた事にするから、何も心配する事はない」

それを聞いた女王は顔をしかめた。

「……なかつた事……？だつたらビルを放して…どうして捕まえるの！」

女王は掴まれていた腕を振りほどいた。

「……女王、少し落ち着きなさい。そればかりはどうしても見逃す事はできないんだよ」

「どうしてよ！私の我が儘でこんな事になつたつていうのに……これ以上どうしようつて言つのよ……」

その場の空気が固まつた。

王様は女王の肩に手を置き、ゆっくり語りかけた。

「女王、君は国民全ての命を賭けてまで、その者を助けたいかい？」

「私だってこんな事は望んでいない。でも、仕方ないんだ」

「……国民全ての命?」

その女王の問掛けに王様は頷いた。

「隣国の王子がお前との婚約を望んでいる。……断れば戦争を行つ

とこゝ圧力付きで」

選択した道

どうしてか世界は上手くいかない。

望むもの程手に入りにくい。

だからこそ何かを成し遂げる事に意味がある

そう思つたとしても

私の目の前にある理不尽な壁は
私がいくらもがいたとしても
決して臆する事はないのだろう

「女王」なんて

なりたくてなつた訳ではないのに……

気が付いたら私は城に連れ戻され、自分の部屋のベットの上に腰掛け、夕暮れの近い窓の外を眺めていた。
そこにドアを開け誰かが入ってきた。

「女王様、王様がお呼びです」

そう呼ばれ、私は王のいる部屋まで案内された。
そこには椅子に腰掛けた王が座っていた。

「女王、少しばかり着いたか？」

「……そうね、でも納得はしていないわ」

「そうか……」

王はそう言い、黙つた。

「…………何か…あるの？」

その沈黙に違和感を感じた私は尋ねた。

「…刑罰は死刑となつた」

「そんなの…つそんなの私は認めない！」

「今日の夕方、とり行われる」

「…えつ…………」

私は慌ててその部屋を飛び出した。

「待ちなさい女王！君が行つたといひで辛い思いをするだけだ！」

そう言われ、私は立ち止まつた。

「…君が行つたところで、どうする事も出来ないんだよ…………」

「何で？」

ビルはただ私の我が儘を聞いてくれただけじゃない。

何か悪い事をしたの？

罰を受けるべき私には何もないのに

何でビルだけがそんな

全てを負わなければいけないの？

「だつたら…私がその荷を負うわ」

逃げないで前を向こう

決して楽な道ではないけれど

その先があるのかさえ分からぬけれど

大切な人

もう傷付けたくないから
⋮

終わりの剣

「ビル！」

女王は死刑場に乗り込んだ。

そこにはたくさんの人の中で見世物の様に椅子に縛り付けられるビルがいた。

「…陛下！？何故ここに？」

そう言つたビルに近付き、女王はビルを縛っていた縄を解き始めた。

「決まつてゐるじゃない！助けに来たのよ！」

「…陛下」

「大丈夫よ！まだ死んでない！死んでな…っ」

最後は涙で声が出なかつた。

「陛下、もういいんですよ」

「良くない！だつて私は納得してないもの！私は…もう…」

そう言つて泣いている女王をビルから離そつと周りの人々が手を出してきた。

「女王陛下、ここは貴女が来る様な場所ではありません」

「そうですよ女王様。貴女様がここにいては……」

その言葉に女王は首を振つた。

「嫌よ！誰がビルを置いて行くもんですか！」

泣きながらそう言つた女王に対し慈悲の想いを持ちながらも人々は二人を引き離した。

「嫌！放して！ビルの所に行かせてよ…」

「女王陛下、どうか落ち着いて下さい。私達だつてこんな事はしたくはないのです」

「つーだつたらどうして…」

そこで空間が固まつた。

「ごめんなさい女王様…貴女様の幸せをとりあげてまで私達が幸せにならうなど、おかしいですよね。…」ごめんなさい

「それでも私達は死者を出したくないのです
辺りが静かになった。

「……私は……別にいいの」

かすれる様な声で女王が言った。

「それでも大切な人だけは傷付けたくないの！」

女王は近でナイフを持っている人からナイフをとり上げた。

「戦争を起こさないでビルを助ける方法は一つだけあるのよ」

女王はナイフをかざした。

「ビル、ちゃんと幸せになつて」

女王は笑顔でそう言い目を閉じた。

「陛下！駄目です！陛下！！」

ビルは縛られていた縄から抜け、女王の元へ走った。

それでも間に合う事はなく

握られたナイフは女王の華奢な体に突き刺さっていた。

真実の物語

空に一筋の虹がかかる
青い空に消えそうな
綺麗な光

辺りには美しい花々が
地面を覆い尽くすまで咲き誇っている

それでも
私が心からこの景色を美しいと思えないのは
隣に貴女がいるから

私は
もう一度と貴女に会えない事を知っています

貴女のいない世界で

私は幸せになれる事はないでしょう

きっと

貴女との約束も果たせないままです。

Dear person

The thing that it is possible
to meet again prays sooner or

広い部屋の中、一人大きな椅子に腰掛け、ゆっくりと本を閉じた少女がいた。

金の髪を携え、白いドレスを身にまとった彼女は大きな蒼い目を閉じた。

辺りは暖炉の火で照らされているだけで他の場所は薄暗く、何があるのかさえ分からない。

「…やっぱりこの終わりもそうなるのね……」

少女はため息を吐くように呟いた。

「…表向きにはね」

その少女の後ろの方から明るい声が聞こえてきた。

「…ママ？」

振り返った少女の目に映つたのは彼女に似た女性だった。

「ママ」と呼ばれた女性は少女に微笑みかけ、近づいてきた。

「ねえ、『表向き』ってどうゆう事？裏があるの？」

近づいてきた女性に少女は尋ねた。尋ねられた女性は人差し指を立ててそっと答えた。

「裏は現実ですからね、あまり他の人に話しては駄目よ。」

そう前置きしてから少女に耳打ちをした。

「貴女が今ここにいるのは、その本のヒロインが私だからよ」

「…え？」

少し不思議そうな顔をした後、少女は何かに気づき彼女の「ママ」の顔を見た。

「さて、私の可愛い娘にはどんな好きな人がいるのかしら？」

「それは…また後日紹介いたしますわ！女王陛下！」

そう言つて少女は走つて部屋を後にした。

「ああゆう所は陛下にそつくりですね」
すぐ近くで男性の声がした。

「あら、その呼び名も久しぶりね」

「そうですね、女王」

そう言つて笑つた後、二人は少女の出て行つたドアの向こうを眺め

た。

「…また誤魔化すのが大変ね」

「大丈夫ですよ、あの子も陛下に似てますから」

「そうね。相手も貴方に似てるかもね、ビル？」

「そうですね…」

肩を並べた二人は幸せそうに笑つていました。

The hoped one .

望むもの

決して諦めずに追いかけよう

真実の物語は

そう告げているから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219c/>

The hoped one

2010年12月18日02時21分発行